

107名医学士誕生

第93回 卒業式

令和3年度大阪大学卒業式が3月24日行われた。本年は感染に十分気をつけながら大阪城ホールで式典が行われ

た。西尾章治郎総長による式辞では、「感染症蔓延に続けて世界情勢の不安定な中、多様性ということが重要である。獲得のために大切なことは負



けることで、一度負けることによりその種は新しい選択をせざるを得なくなり、多様性を獲得できる。決して負けることを恐れず、そこから新しい居場所を作っていくとうとするフロンティア精神をもって

また、医学部医学科卒業式が同日午後3時より行われ、本年度107名の新医学士が誕生した。本年度は大阪大学活動基準に従い、全員がA講堂に集まることができた。熊ノ郷淳医学部長より一人一人に学位記が授与され、「コロナ禍、ウクライナ情勢と、予

期せぬことが起こっている状況、既存の概念や知識では立ち行かない時代になっている。教科書やガイドラインに書かれたことを単に受け身で身につけるだけでなく、明日の医学・医療を切り拓いていくような医学者、医師、医療人となるのが阪大医学部出身者の使命。皆のこれから大いに期待している。」と激励された。土岐祐一郎医学部附属病院長は、「働き方改革は決して研修医・専攻医が楽になるものではないが、多少きつくてこそ医師になって最初の数年で患者さんや病氣と真

剣に向かい合う時間を充実させてほしい。将来どのような道に進もうが、その経験は一生の宝になる。」と祝辞を贈られた。最後に、吉川秀樹医学振興銀杏会(学友会)理事長が祝福の言葉を述べられ、学友会からのお祝いを卒業生に贈られた。理事長は、「緒方洪庵が、もつとも大事にし、弟子たちに教えてきたことに『実学』という言葉がある。学んだことが、今生きている人に役立たなければ、そんな学問は死学であって、実学ではない、という教えです。卒業

業の機会に、是非、この適塾の精神を思い出して頂き、実際に苦しんでいる患者さんの役に立つ立派な医師になって欲しい。」と激励の言葉を述べられた。

令和3年度「楠本賞」は菅波修司君にその栄誉が贈られた。また、令和3年度博士課程優秀者として8名にその栄誉が授与され、博士課程の伯井秀行君と学部学生の井上真生君に「山村賞」が贈られた。MD研究者育成プログラム修了者6名も認定を受けた。



第262号
公益社団法人
医学振興
銀杏会
(編集同人)
荻原俊男 米田正太郎
杉本 央 富田尚裕
上田啓次 朝野和典
木村 正 森井英一
日比野浩 馬場幸子

定期総会のご案内

開催日 令和4年5月28日(土)
開催場所 大阪大学医学部銀杏会館
(三階阪急・三和ホール)
総会 午後1時30分～4時15分
特別講演 「腸管内細菌と宿主の相互作用機構」
演 者 大阪大学教授 竹田 潔先生
(本部役員・講演者・学内報告者・助成金採択者・奨学金採択者以外の)会員の皆さまは、オンライン視聴のみとさせていただきます。感染が縮小し会場にお越し頂くことが可能となりました際には、ホームページでお知らせいたします。

視聴方法は13面のオンライン登録方法をダウンロードしてください。

病院長就任のご挨拶



竹原徹郎 (昭59)

そのご指導や経験を生かして、院長として山積する課題に取り組んでいく所存です。

この度、大阪大学医学部附属病院 病院長を拝命しました消化器内科の竹原徹郎です。私は木村正先生、土岐祐一郎先生のもと医療安全・人事労務担当の副病院長を4年務めさせていただきました。

題として、「医師の働き方改革」、「病院再開」の働き方改革、「COVID-19」に対する対応をあげることができ

ます。「医師の働き方改革」は、令和6年春に現在の猶予期間が終了し、本格的な導入にな

ります。どの病院にも求められている社会的な要請ですが、大学病院では、職員の研

鑽と業務の切り分けなど特有の難しい問題を抱えています。阪大病院では、この春から裁量労働制以外の職員を対

象に、「ピーコン」による勤怠管理システムを導入し、できるだけ合理的かつ客観的な対応ができるよう準備しています。また、医師の働き方改革には、多職種間のタスクシフトが重要であり、看護師の

ります。どの病院にも求められている社会的な要請ですが、大学病院では、職員の研鑽と業務の切り分けなど特有の難しい問題を抱えています。阪大病院では、この春から裁量労働制以外の職員を対

象に、「ピーコン」による勤怠管理システムを導入し、できるだけ合理的かつ客観的な対応ができるよう準備しています。また、医師の働き方改革には、多職種間のタスクシフトが重要であり、看護師の

特定行為研修や薬剤師のレジデント研修も積極的に進めていきます。

「病院再開」については、令和7年の稼働を目指して、新棟の建設が加速しています。これは、現在の外来棟の北側に、新たに「統合診療棟」を建設し、その後、外来棟を解体するものですが、単なる外来機能の拡充だけではなく、新棟には手術室やICU、アイセンター、総合周産期母子医療センター、各種検査部門、未来医療開発部、バイオバンクなどが設置されており、入院、外来の如何に関

わらず、診療機能の高度化を図るものです。まさに十年先の未来を見据えた、二十年先の未来を見据えた、再開発事業になっていきます。工事の槌音が響くようになるに従い、患者さんにはどうしても不便をおかけすることになります。この難しい期間に、診療機能を落すことなく、病院運営をしてまいります。最後に、未だに終焉の見通しのたたない「COVID-19」に対する対応です。阪大病院は、この二年間、土岐前病院長の果敢なご判断のもと、病院一丸となって、地域のCOVID-19の診療に

医学部長通信 第20回

熊ノ郷淳 (平3)

21世紀になって登場した免疫調節薬(生物学的製剤、抗体医薬)は、関節リウマチなどの自己免疫疾患治療薬、喘息などのアレルギー疾患治療薬、抗免疫チェックポイント阻害抗体によるがん治療薬として現在臨床の現場で広く使われています(すべての薬の売り上げの6〜7割を占めているとも言われています)。

治験中の薬剤も含め、今後も次々と新しい免疫調節薬・バイオが登場すると予想されています。私の専門領域である免疫疾患においても、ある程度の臨床経験があれば、その作用機序や免疫の知識が無くても医者がバイオ・免疫調節薬を比較的簡単に使用できる時代になっています。

このような成果の多くは、1980年代、1990年代、分子生物学的な手法をいち早く取り入れることにより爆発的に進展した基礎研究・サイトカイン、サイトカインシグナル、共刺激分子の同定などへの恩恵によるものです。何らかの形でこのムーブメントに関わり、その中で培われた基礎研究に対する

「皮膚感覚」を有した先生方が physician scientist として免疫調節薬・バイオの臨床現場への普及に貢献されてきました。臨床の先生方も、この時代、physician scientist として一つの高みにあつたのかもかもしれません。

一方、我が国の現状に目を向ければ危機的な状況になっていることに気づかれます。次世代シークエンサーの登場による Big Data 活

用、バイオインフォマティクス、臨床データに紐づけられたAI診療、イメージング・画像解析・計測技術開発、クワイオ電顕、Single Cell 解析など、これらの技術革新のキャッチアップにすら汲々として、世界の技術革新の波からは一歩も二歩も遅れている状況があるように感じています。またこの10年ほど「応用研究」があまりにも重視されたために、「病気に効く、効かない」のみが研究の評価と

なり、純粋にサイエンスの質を評価する peer review のシステムが揺らいでいるようにも思います。一見時代を謳歌しているように見える免疫調節薬・バイオの開発すらも、実は限られた標的分子に薬剤開発が集中している状況があります。このような状況の中でも次代を担う優秀な人材を輩出していくことが阪大医学部の使命と感じております。

令和3年秋の叙勲
令和3年秋の受賞
令和4年春の受賞

瑞宝双光章
上原賞
第3回太田原豊一賞

亀井 勲 (昭39)
岡野栄之 (昭58・慶應大医)
木下タロウ (昭49・東大農)

(発表日順)

寄 附 御 礼

令和3年12月8日から令和4年4月11日までに、20,252,172円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となっております。また、令和3年7月14日より当会は、寄附金に対してより有利な控除である税額控除制度が選択できる団体として認定されました。詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

岸本忠三先生 (阪大医 昭39) より、20,000,000円をご寄附頂きました
寺岡 修先生 (阪大医 昭49) より、50,000円をご寄附頂きました
吉川秀樹先生 (阪大医 昭54) より、100,000円をご寄附頂きました
車猿会 (癌研有志の会) より、52,172円をご寄附頂きました
横山マサ子先生 (阪大医 昭50) より金一封をご寄附頂きました

学友会では、新入生が阪大医学部の歴史を知り、母校に対する誇りや同窓の仲間意識が高まることを目指し、平成29年より体験型の医学部歴史探訪を行っています。この事業は、会員の皆様のご寄附や医学系研究科(教務室他)、適塾記念センター、各学年の在校生有志の方々のご協力、毎年入学式直後に、医学部の源流である「適塾(大阪府中

央区北浜3-3-8)の見学会として行われています。令和2年のCOVID-19感染蔓延の影響により、ここ2年間は現地での開催ができず、銀杏会館・阪急三和ホールでの開催やオンライン聴講となっていました。しかし、コロナ禍でもコロナ禍なりの対策が取られてきたこともあり、今年度はなんとか現地開催にこぎつけることができ

ました。一回ごとの見学・受講の人数を例年の半分にしたが、逆に少人数となったことで、新入生同士、また先方とのコミュニケーションを図るには良かったようにも感じました。

まず始めに、エル・大阪で行われた医学史講義では、ともに学友会理事である渡邊幹夫先生(平5)、馬場幸子先生(平16)から「母校の歴史を学ぶことで、誇りを持ち、同窓の仲間意識を高めることは、充実した大学生活を送ることにつながる」とのお話がありました。適塾以降の大阪大学

新入生諸君、 阪大医学部の源流を味わおう！

ました。一回ごとの見学・受講の人数を例年の半分にしたが、逆に少人数となったことで、新入生同士、また先方とのコミュニケーションを図るには良かったようにも感じました。

れまでの多くの先輩方の貢献があつて今日があるのだと改めて思い知らされました。

適塾では、島田昌一教授(昭61・森井英一教授平4)から、緒方洪庵先生の紹介や適塾の歴史の紹介がありました。適塾当時の塾生は、閉鎖的な時代に新しいことへのチャレンジに渴望し、競い合つて成長したといえます。新入生の皆さんも受験生時代にはコロナ禍での苦勞もありましたが、これからは友人とともに自分の好きなことをとことん追求できる大学生生活が大阪大学では可能になるというお話がありました。新入生の方々も真



馬場先生による医学史講義



島田教授による新入生への説明 (学部4年石原百華さん撮影)



森井教授による新入生への説明 (学部4年石原百華さん撮影)

ました。適塾以降の大阪大学医学部の歴史が紹介され、こ

れまでの多くの先輩方の貢献があつて今日があるのだと改めて思い知らされました。

適塾では、島田昌一教授(昭61・森井英一教授平4)から、緒方洪庵先生の紹介や適塾の歴史の紹介がありました。適塾当時の塾生は、閉鎖的な時代に新しいことへのチャレンジに渴望し、競い合つて成長したといえます。新入生の皆さんも受験生時代にはコロナ禍での苦勞もありましたが、これからは友人とともに自分の好きなことをとことん追求できる大学生生活が大阪大学では可能になるというお話がありました。新入生の方々も真

まず始めに、エル・大阪で行われた医学史講義では、ともに学友会理事である渡邊幹夫先生(平5)、馬場幸子先生(平16)から「母校の歴史を学ぶことで、誇りを持ち、同窓の仲間意識を高めることは、充実した大学生活を送ることにつながる」とのお話がありました。適塾以降の大阪大学

れまでの多くの先輩方の貢献があつて今日があるのだと改めて思い知らされました。

適塾では、島田昌一教授(昭61・森井英一教授平4)から、緒方洪庵先生の紹介や適塾の歴史の紹介がありました。適塾当時の塾生は、閉鎖的な時代に新しいことへのチャレンジに渴望し、競い合つて成長したといえます。新入生の皆さんも受験生時代にはコロナ禍での苦勞もありましたが、これからは友人とともに自分の好きなことをとことん追求できる大学生生活が大阪大学では可能になるというお話がありました。新入生の方々も真

山本琢磨(平18)

剣な眼差しで耳を傾けており、実体験の新鮮さを心から享受しているようでした。

本年は例年通りとはいかないまでも元の形に戻った開催になりました。ここ数年の非常事態の中で高校生・受験生という経験をされた新入生の皆さんは、苦勞があつたからこそ人生での貴重な期間だったと思います。克服できない壁はないと、皆が一体となりこれからの医学部を築き上げ、将来、皆で思い出して語りたいあつていただければと思います。

歴史探訪は、後輩が大阪大学医学部への愛着や誇りを育むきっかけになるものと信じております。ご協力いただきました皆様に改めて深く感謝申し上げます。

代議員候補選出のご報告

代議員選出管理委員

前号のニュースに同封した代議員候補者について、本年1月に行われた信任投票の開票ならびに集計を2月7日に行った結果、不信任票数が正会員総数7,177名の5%を超えた候補者はありませんでした。よって候補者307名全員が次期の代議員候補に選出されました。

「大阪大学医学部の歩み (第二版)」 発行のお知らせ

ご寄附をもとに、大阪大学医学部の沿革をまとめて、平成29年に制作した「大阪大学医学部の歩み」ですが、この度、新たに吹田移転後の歩みを加えた第二版が完成いたしました。

ご希望の方は事務局までお申し越し願います。当会ホームページ (<https://www.ichou.or.jp>) から閲覧可能となっております。

トピックス

新たな電気信号の役割を探る

統合生理学教室では膜電位センサーをもつ膜たんぱく質に着目し、生体の電気信号の基本的仕組みを明らかにする研究を行ってきました。電気信号というと心電図や脳波に代表される、筋や神経の情報伝達を思い浮かべるでしょう。これらは、たとえば降圧剤(ニフェジピン)や抗不整脈薬(リドカイン)の標的であるCaチャネルやNaチャネルなど、電位依存性チャネル(図)が良く知られています。我々が研究対象としているのは、これらの親戚ではあるのですが、電気的興奮性をもっていない細胞にも発現している、膜電位センサー分子群です。Hv1は主に血球細胞と精子で機能するプロトン選択的イオンチャネルで、生体には酸味を受容する味蕾で機能するプロトンチャネルと並び、ヒトのゲ

ノムがコードするプロトン選択的イオンチャネルの一種です。Hv1は膜電位変化を感知するとプロトンの輸送を引き起こし活性酸素産生の調節をしています。またVSPという膜たんぱく質は、膜電位センサーと酵素領域を併せ持ち、精子に多く発現しています(図)。膜電位変化に応じて細胞内側の脂質分子の分布を変化させることで精子の鞭毛の動きを微妙に調節していることがわかってきました。これらの膜電位センサー分子は、これまで非侵襲的な電気信号の解析が困難な、精子や血球細胞で機能しており、最近ではエンドソームなどの細胞内の膜オルガネラでも機能することがわかってきました。これらの部位での膜電位計測は従来の電極法では困難であるため、現在我々は膜電位を可視化できるツールの開発にも取り組んでいます。たとえば、ニューロン集団から速い電気活動をイメージングするツール開発の競争において、約半数はもつともシンプルな電位センサードメインをもっているVSPを元に作製されています。生理学は現象を定量的に解析して背後にある基本原理を推定する研究が中心でしたが、生命現象に関わる分子やゲノ

ムの情報がつぶさに明らかにされ、様々な側面から多角的に現象を理解できる時代になってきました。私が医学部生だった頃は、*omics*別の学問体系で、大学は専門店の集まったデパートのような雰囲気でしたが、いまは解析技術の進歩は速く、革新的技術のいくつかは素人でも垣根を超えて気軽に参入できるようになってきました。我々の一連の研究も医学系研究科内での連携はもちろん、蛋白研、産研、

微研、保健学科、工学研究科の多くの研究室、更には共同研究実習センターや、COMI棟のオミックスセンターなどの共通施設に大きく支えられています。競争が激化し成果が求められる時代ですが、一方で根気とアイデアさえあれば(お金も必要ですが)専門性を越えて、わくわくする研究が実現可能になってきたと思います。

統合生理学

岡村康司(昭60・東大医)

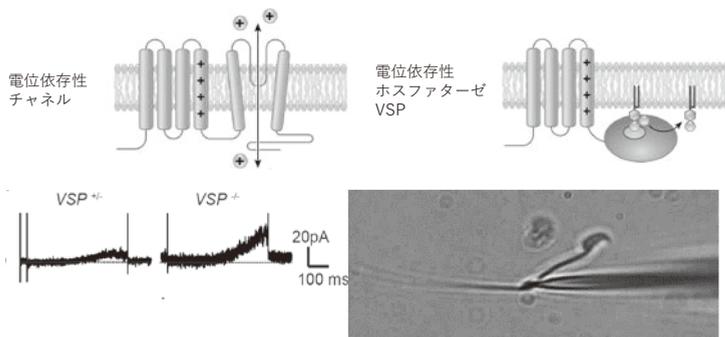


図 上：電位センサーたんぱく質の種類。電位依存性ホスファターゼ(上右)は、電位依存性チャネル(上左)と異なり、イオンを透過させるドメインの代わりに、癌抑制遺伝子として知られるPTENと相同な領域をあわせもち、電位変化で酵素活性を変化させる。下：精子からのパッチクランプ法(右)によるK⁺電流の計測。VSPをノックアウトしたマウスの精子から記録されるK⁺電流(下図右)は正常のマウス(下図左)に比べて大きくなっている。これによりCa²⁺流入が増え、運動性に異常が出ると考えられる(河合ら、PNAS, 116(51):26020-26028, 2019)。

提

言

本年2月に人間の存在の本質が問われる重大なことが立て続けに二つあった。一つは、24日にロシアがウクライナに軍事侵攻したことだ。しかも、攻撃の目標施設に原子力発電所があり、また、核兵器の使用の可能性もちらつかせるなど、先の世界大戦以前に遡つたような暴挙と言える。更に、

このロシアの動きに端を発してわが国においても核共有の論議が浮上しようとしていることだ。筆者は、広島原爆被爆の2日後に広島県で生まれたこともあり、戦争、特に核兵器については特別の感覚を抱いている。いや、この感覚は日本人だけではない。昭和20年の核爆弾使用10年目の昭和30年に出されたラッセル・

過ちて改めざる、

是を過ちと謂う (孔子)

アインシュタイン宣言では「将来の世界戦争においてはかからず核兵器が使用されるであろうし、そしてそのような兵器が人類の存続をおびやかす

う勧告する。」と述べている。にも拘らず、21世紀の現代このようなことが起きたのである。もう一つは、ウクライナ侵攻の2日前の22日に旧優生保

ことである。旧優生保護法は昭和23年から平成8年まで続いた法律で、その間、1万6千人以上に強制不妊手術が実施されている。強制不妊手術をめぐっては平成30年以降、

この状況下で、大阪高裁と東京高裁が続いて原告側の逆転勝訴となる二審判決が下された意義は非常に大きい。これ

は、正に人間の尊厳の回復と言えるのではないか。今回、対照的な二つの例を示したが、基本的には人間の存在の本質そのものへの対応の違いである。長い過去の歴史の中で、人類は過ちを含め多くのことを学んできており、そのことをどう行動に生かすかで人類の未来が決まることを孔子は教えているのではないだろうか。果たして、今、我々が選択する道は？

門田守人(昭45)



...その163

がんの医療はこの数十年の間に大きな変貌を遂げました。治療成績が悪く、「不治の病」と恐れられていた昔の時代に比べると、最近の予後の向上はめざましく、最新の相対5年生生存率(平成21(2009)1平成23(2011)年地域がん登録データ)はがん全体で64%(女性67%、男性62%)と6割を超えました。

これから10年たつて治療法がさらに進歩している現在、5年生生存率は約7割と推定されており、もはやがんは不治ではなく治り得る病気に変わりました。

かつては不治の病と呼ばれ、がんに対するイメージは非常に悪く、患者はがんになったことを隠しましたが、がんの罹患者が増加し、国民の2人に1人と多くの人がかかるありふれた病気になった今日、世間の見方も変わり、公表する人も多くなりました。私たちが医師になった頃は不治という理由から、患者に本当

のことを言いませんでしたが、今では必ず告知をするようになりました。以前の根治的治療はほぼ手術に限られており、患者の意向をあまり考えずに病院側で治療方針を立てましたが、

視されます。がんが治ればよいというのではなく、もしかしら治すことよりも、毎日の生活を送ることの方が大事だと言う患者もいて、患者の要望も多様になりました。また、治療成績が上がるにつれ、生存者が増えて、自分の体験を語る方も多くなり、その体験を次の医療に活かせるようにもなってきました。

現在、がん診療連携拠点病院が中心となつてがん医療が行われていますが、その要件の大部分は医療内容以上に、がん患者支援の項目です。がん以外の分野も同じ流れと思いますが、私たちは色々なことに幅広く配慮しながら、医療提供をしていく必要があります。

がんの医療の変貌

最近治療法の見方も変わりました。私たちが医師になった頃は不治という理由から、患者に本当

に全力をあげて、治療の結果に全き注意が払われることは、ほとんどありませんでしたが、現在では治療結果と同じく、QOL(生活の質)も重

このようにがん医療が変わつて来るとともに患者さんの求めるニーズが多様化してくると、病院側もそれに対応する必要がある、変革を迫られるようになってきています。

次回は大阪警察病院病院長の澤芳樹先生(昭55)にお願いしています。

松浦成昭(昭51)

診	療
科	科
紹	介

心臓血管外科

大阪大学心臓血管外科は、大正11年に設立された第一外科を前身とし、今年で100年の歴史を刻んでおります。令和3年7月に同講座開講から数えて8代目、外科学講座

DNAを受け継ぎながら、絶えず時代を先取りする臨床・研究を行い、これまで治すことのできなかった患者に福音をもたらしていこうと考えております。

宮川繁が就任いたしました。本講座では、昭和31年本邦初の人工心肺を用いた開心術を皮切りに、先天性心疾患に対する川島法の開発、平成11年の脳死法案下での心臓移植、大動脈瘤に対するステント治療の開発、世界初の心不全に対する再生医療等製品「ハートシート」の保険収載、世界初の他家iPS細胞由来心筋細胞シート移植等の先駆的な業績を残してきました。この世紀の間、絶え間ない研究と飽くなき挑戦をし続ける精神の元、これまで国内外の心臓血管外科を牽引してきました。さらに我々は世界に冠たる組織への成長を目指し、先達の

当科の特徴は、心臓弁膜症、冠動脈疾患、重症心不全、先天性心疾患、そして末梢動脈疾患等あらゆる循環器疾患に対して全ての外科治療が可能なことであり、特に重症化した疾患の外科治療において、良好な成績をおさめてきました。そして他施設に先駆けて経カテーテル大動脈弁置換術を導入すると同時に、小切開弁膜症手術、カテーテルを用いたMitral Clipを導入してきました。また、大動脈瘤に関しては、ステント治療を世界に先駆けて開発し、これまでの治療とのハイブリット治療を積極的に行ってまいりました。上記のように、当科は低侵襲手術のリーディングホスピタルであり、今後も更なる発展が期待されます。また、心不全外科治療は、当科が先導してきた分野です。植込み型人工心臓の日本での認可は極めて遅く、このデバイスラグを取り戻すため、未認可であった植込み型人工心臓を初めて導入し、その保険収載や永久使用に繋げてきました。心臓移植においては、脳死法案下での心臓移植を再開させ、心肺同時移植や小児心移植が施行可能な国内有数の移植施設であります。さらに、循環器内科とハートチームを形成し、ベストな高度医療を提供し、重症度が高い患者を治療しているにも関わらず、治療成績はトップクラスであり、日本国内での最終受け入れ病院としての役割を果たしております。

Academic Surgeonを育成すべく、常にベッドサイドを意識した研究テーマの構築



と実践、特にトランスレーショナルリサーチを真髄とした研究を基盤として、当科の研究は発展してきました。自己筋芽細胞シートは平成14年から基盤研究から始まり、世界初の心不全に対する再生医療製品「ハートシート」として、虚血性心筋症に対して保険償還されました。iPS細胞に関しては、平成18年から京都大学iPS細胞研究所の山中教授と共同研究を開始し、令和2年に世界初のiPS細胞由来心筋細胞を用いた心不全患者に対するFirst-in-human試験を行いました。難治性疾患に病める患者の福音となるべく、さらに新しいコンセプトを兼ね備えた新規治療法の開発を行っており、様々な技術を用いて、拡張型心筋症をはじめとした難治性疾患をターゲットとした新しい治療体系の確立を目指しています。また最近では、若手医師が臨床の現場からヒントを得て医療機器を開発し、ベンチャー設立に繋げる「バイオデザイン」の試みが行われています。現在大阪大学関連施設は全国37施設を数え、関連病院群全体で、手術の質向上のためのデータベース構築、若手外科医育成に力を入れております。

これまで臨床、研究、教育の実績を積み上げてきました。後とも何卒一層のご指導ご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

宮川 繁 (平6)

病院 紹介

独立行政法人労働者健康安全機構

大阪労災病院

大阪労災病院は令和4年1月1日同じ敷地内に建築中であった新病院に移転しました。正確に言えば、移転したのは病院本体である病棟・外来部門で、その他の周辺部門はまだ工事が進行中です。事務・医局部門は、旧来の事務・医局棟を新病院と渡り廊下

つないで継続使用します。現在その内部を再配置工事中ですが、その完成は令和4年11月になります。また、旧病院は事務・医局棟を除きすべて解体し、跡地は駐車場になる計画です。正式な新病院のグランドオープンは今和6年6月駐車場の完成を待ってからというスケジュールとなっています。

大阪労災病院は、現在の独立行政法人労働者健康安全機構の前身である特殊法人労働福祉事業団によって設立された全国労災病院の一員で、昭和37年に開院しました。働く人々の健康を支援する勤労者医療を使命とすると同時に、

南大阪地域の総合的医療を中核的に担う病院として設立されました。その後の医療環境の変遷もあり、現在では地域の急性期医療、高度専門医療を中心的に担う病院となっています。今回の新病院は開院以来じつに60年ぶりに新築されたものです。

新病院の病床は旧病院と同じく678床で、建物は水害時に問題を生じる可能性のある地下構造は設けず地上階のみの10階建て（高層棟）とし、エネルギー関連設備は外来棟（低層棟）屋上の4階に設置しています。1、2階は各科外来ならびに救急外来と検査部門、放射線診断・治療部門、薬剤部門などを配備しました。1階の救急外来は診断・治療が迅速に行えるように画像診断部門と内視鏡検査・治療室に隣接して配置されています。新病院では、設計思想として、外来、病棟ともにできるだけ患者さんとスタッフの動線は交錯しないように配

慮しながらも、対面時には距離が離れないように開放的でフレンドリーな内部設計としています。がん患者さんの利便性とアメニティには特に配慮し、各科外来とは独立して2階に31床の外来化学療法室と、がん相談支援センター、がんゲノム医療センター、緩和ケアセンターおよびがんサロンからなるがんセンターを設けました。がん相談支援センターは同じフロアにある治療と就労の両立を支援する治療就労両立支援センターとも連携しながら運用されています。

3階には手術室、集中治療室、心カテ室からなる高度医療を担う部門を集中的に配置しました。手術室は16室で、ハイブリッド手術、ロボット支援手術、ナビゲーション手術など各科の専用医療機材を設置しても手狭とならない十分なスペースを確保した設計となっております。年間手術件数13,000件の実績を担え

る体制としました。手術室に隣接してICU 12床とCCU/HCU/SCU 16床を配置し、CCUのそばには心カテ室を3室設けています。この3階フロアは1階の救急外来と専用エレベータで結ばれ、救急患者は心カテ室、集中治療室、手術室いずれにも容易にアクセスできる配置となっています。

新大阪労災病院はこのようなハード面の大幅な更新をふまえて、がん診療、循環器病／脳卒中診療、そしてQOLに大きくかわかる感覚器疾患／運動器疾患に対する診療を中心として急性期医療ならびに高度専門医療を推進していく所存です。学友会の先生方には今後ともご支援、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

独立行政法人労働者健康安全機構

大阪労災病院

院長 田内 潤（昭50）



図1. 旧病院に隣接して建築された新病院



図2. ハイブリッド手術室